

加齢性難聴 2025.2

音が聞こえにくい状態を難聴といいます。難聴の原因は、加齢、騒音暴露、遺伝、耳や脳の感染症、特定の抗生物質や化学療法薬剤、外傷、糖尿病や高血圧などの病気などです。



聴覚をつかさどる外耳は音を集めて鼓膜に伝え、中耳は鼓膜から音を増幅して内耳に伝え、内耳は音の振動を電気信号に変えて聴神経細胞に伝えます。聴神経細胞から信号が脳に伝えられ、始めて人は音を理解します。

外耳から中耳まで、音が伝わりにくくなるものを伝音性難聴、内耳から聴神経まで音を感じる部分の異常によるものを感音性難聴、両者が同時に混在するものを混合性難聴と分類しています。

加齢以外に特別な原因がない難聴を加齢性難聴（老人性難聴）と呼びます。これは音を感じる聴神経細胞（有毛細胞）が加齢とともに老化、減少して起こる感音性難聴です。聴力の低下はふつう40歳ごろ高音域から始まり、はじめは余り自覚することがないのですが、75歳以上になると約半数の人が難聴に悩んでいるといわれています。騒音の多い職場でも感音性難聴が徐々に進行し、現役時代は気にならなくても定年後60歳ごろから聞こえが悪くなった人が急激に増えてきます。

聴神経細胞はいったん減少すると再生はしません。また、内耳から脳へと音を伝える神経経路に障害が起きたり、脳の認知能力が低下することも聴覚に影響しています。このため、加齢性難聴には根本的な治療法はありません。

難聴の進行を生活習慣の改善で遅らせることは可能です。職場では騒音暴露を避け、耳栓をする。大音量でテレビを見たり音楽を聴いたりしない。イヤホンは適切な使用を心掛けるなどです。

加齢性難聴をそのままにすると会話が困難になり、社会的な孤立感が増す、聞こえないことによるストレスから抑うつ状態になる、認知機能の低下を招く、聞こえないことによる安全性のリスクなど様々な影響を及ぼします。

加齢性難聴では補聴器が大きな力を発揮します。補聴器は個々の聴力に合わせて音量や音質を変えて言葉を明瞭に聞こえるようにします。ただし補聴器を使いこなすためには専門家の指導を受け一定期間訓練やリハビリが必要です。金山病院耳鼻科ではご相談に応じています。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦